

1) 雅弘の原爆生存者としての経験について

★私が今、被爆者としていきていることは、あらゆる人に、自分の体験を素直に伝える、義務と責任があるということです。戦争の犠牲者の一人として、戦勝国、敗戦国の境を越えて、戦争は人間が犯す最もつまらない、罪深い行為だと伝えることが、経験者に課せられた使命だと思います！

2) 禎子さんとの思い出について

★私の一番辛い記憶が、禎子との思い出です。

1955年2月21日の入院のから10月25日、死亡迄の8ヶ月間、禎子はとても辛い体験を一人で乗り越えました。入院中、私や両親の前で痛いという言葉を言わなかったのです。

毎日、泣きたい思いを自分の胸に納めて、泣かなかったのです。

寂しくて、私や両親に甘えなかったのです。

そして、禎子はその痛さ、辛さ、苦しさを折り鶴をに語りかけながら必死に折っていました。一人で居る不安や寂しさを折り鶴に託しました。

夏のある日、禎子が病院の屋上に、星を見に上がろうと誘うのです。私は始めて本気で禎子の手を引き階段を上りました。その細さ、小ささに驚きました。

「お兄ちゃん人はみんな死んだらお星様になるのかね？」と何かを暗示するかの様に私に言いました。今空を見上げるたびに、禎子の優しい顔が私に語りかけるのです。

「お兄ちゃん、元気！」・・・と。

3) 折り鶴の象徴と重要性について

★お金に困っていたお父さんお母さんのために、禎子のお墓を建てようと話し合ったクラスメイトの呼びかけが、原爆の子の像の建立につながりました。

その像の一番上で少女が、折り鶴を天に向かって捧げています。その少女の顔は本物の禎子の顔の通りに造られています。

「千羽折れば願いが叶う」と言う折り鶴伝説を父から聞いた禎子は、自分の命の限り折り続けました。その事を知った世界中の方々から、様々な願いを込めた折り鶴が捧げられます。折り鶴は禎子の分身です。自分の命の残り時間を知ってしまった禎子は、なげくことも、恨むこともせず、自分の思いを折り鶴に込める為に、来る日も来る日も折り続けました。しかも自分のためにではなく、両親や家族の事を心配しながら折り鶴を折りました。その心こそが私が皆様に伝えたい心、「思いやり」の心なのです。

その一つの思いやりの心は、自分の周りに小さな平和を創り出します。

小さな平和の先に大きな平和があります。禎子が自分の命をかけて教えた「思いやり」の心こそは、私達みんなが持ち合わせなければならない大切な心がけだと思います。

この心をつなげていくキッカケが、折り鶴を折る事だと、私は思います。

禎子は折り鶴、折り鶴は平和、平和はみんなの願い！

